取手市「放課後アートの時間」(1)
―アーティストとして参加して―

木俣 創志

1. はじめに

2020～21 年度(令和 2～3 年度)のコロナ禍において、取手市主催「放課後アートの時間」(全 3 回)に計 2 回、全 17 日間にわたってアーティストとして参加し、小学生を対象とした様々なワークショップを企画・実施する機会に恵まれた。

「放課後アートの時間」は取手市(茨城県)による独自の事業であり、その運営を NPO 法人 取手アートプロジェクトオフィス(以後「ＴＡＰ」)に委託している。スタート時(2020 年度)は「芸術家パートナーシップ」と呼ばれ、次年度には「放課後アートの時間」となって親しみやすいネーミングとなった。

アーティストと放課後子どもクラブに居合わせる子どもたち、放課後子どもクラブの運営を支える人々が関係性を築き、個々の視点や専門性を活かしたプログラムを数日間にわたって実施する。2022 年度(令和 4 年度)の 3 回目(3 年目)で一旦終了するも、小規模ながら 2023 年度(令和 5 年度)に放課後子どもクラブの現場を支える支援員の強い希望もありリスタートされ、また来年 2025 年度(令和 7 年度)も事業の継続が予定されている。

ＴＡＰが取りまとめ発信した様々なレポートから、「放課後アートの時間」において子どもたちは大変豊かな時間を過ごしたことが伺える。私自身も子どもたちと充実した日々を過ごした記憶が未だ鮮明である。(註 1)

本稿ではこの事業について、**「放課後アートの時間」の様々な独自性を主なテーマとして、かかる独自性の長所とその理由を―参加アーティストの立場から**、今後の継続と全国的な展開を祈念しつつ述べる。

尚、「放課後アートの時間」のシステムの詳細についてはＴＡＰホームページ等を参照されたく、本稿では文脈上必要となった場合にとどめたい。

2. 「放課後アートの時間」の独自性

(1) 子どもたちの出入りの激しい環境

放課後子どもクラブでは、子どもたちが一斉に入室し帰宅するということが無く、出入りが頻繁でバラつきがある。曜日、学年等により学校の終業時間が定まら

ず、保護者による迎えの時間も様々ゆえに、子どもたちの顔ぶれは常に変化する。次節でも触れるが、こうした“夜店”的な環境の中でアーティストに求められることは、文字通り“夜店の店主”の如き「緻密さとアバウトさ」ではないだろうか。

私の場合、ほぼ全ての活動日を(自身の都合で)水曜日と固定したことが、参加する子どもたちの顔ぶれの変化を最小限にとどめ、親睦を深めたり同じ話をリピートせずに済む等の点で幸いした。

一方、初年度では、作品が完成するまでの時間が短くて済む「水面プリント(マーブリング)」や「和紙の折り染め」を活動の導入として選んだが、これは（遅い入室、早めの迎え等により）活動時間が短めの子どもを考慮したためである。この点、入退室時間がイレギュラーなこうした子どもたちの情報を、予め支援員が伝えてくれる等の配慮には随時助けられた。

子どもたちの出入りの激しい環境ではあったが、総じて、子どもたちは必要以上に参加時間帯を気にすることなくアートを楽しむことが出来ていた様である。

(2) 強制参加ではない子どもの自由意思尊重

本事業がスタートした初年度(2020 年度)、全活動終了後の「活動フィードバック」アンケート項目のひとつに「参加者の年齢層の幅や流動性がある等、他には無い放課後子どもクラブならではの条件や環境の中での活動において工夫された点、必要だと感じた要素等がありましたら教えてください。」とのQがあった。これに対する私のAは以下①②の通りである。

「①こうした“夜店的”(ゲリラ的？)な環境のなかでアーティストに求められることは、やはり“緻密さとアバウトさ”の両方かな、とあらためて感じました。②活動に参加しない子どもに、支援員さんが「あなたもやってみたら」と声掛けして下さいます。とても嬉しいのですが、(学校の授業と異なり)みんなで一斉に同じことをしなくても良い場として、例えば、傍で見ているだけとか、やってみたくなったら参加するとか、そばで活動のぬくもりを感じながら漫画を読んでいるとか、ある意味、個々の活動のダイヴァシティを学ぶ好機と捉えてみては、と思っています。」(原文)

上記②について。支援員には恐らく「その場に居合わせながら参加しない子どもはアーティストに失礼」という様な意識があり、これはワークショップの雰囲気を大切にしようとする温かな配慮であろう。しかしながら、例えば(戦いや暴力の非暴力化たる)スポーツを学ぶ際に体罰がナンセンスであるのと同様、そもそも(自由を尊重し

て然るべき)アートの世界の入口での“強制参加”は、本事業の主旨に明らかに反している。

子どもたちは、小学校では(休み時間以外、あるいは休み時間も)集団行動を強いられることが多い。せめて放課後は“自由な解放区”であるべきだ。子どもたちにとって「放課後アートの時間」が自由参加型のイヴェントとなることで、小学校での一斉参加型もしくは強制参加型の授業等とは異なる一味違ったユニークな時間となって欲しい。また一方、企画者であるアーティストにとっては、自由参加という前提によって自身のワークショップが子どもたちにとってどれほど魅力的かを知るバロメーターにもなる。

以上の理由から、私自身はワークショップに参加しない子どもたちの存在を気にせず自分の用意したプログラムを遂行し、勉強している子どもの邪魔にならぬよう会場を設営し、漫画を読みたい子どもがいるときは書棚に漫画を取りに来る子どもの動線に配慮した道具のセッティングを行なった。

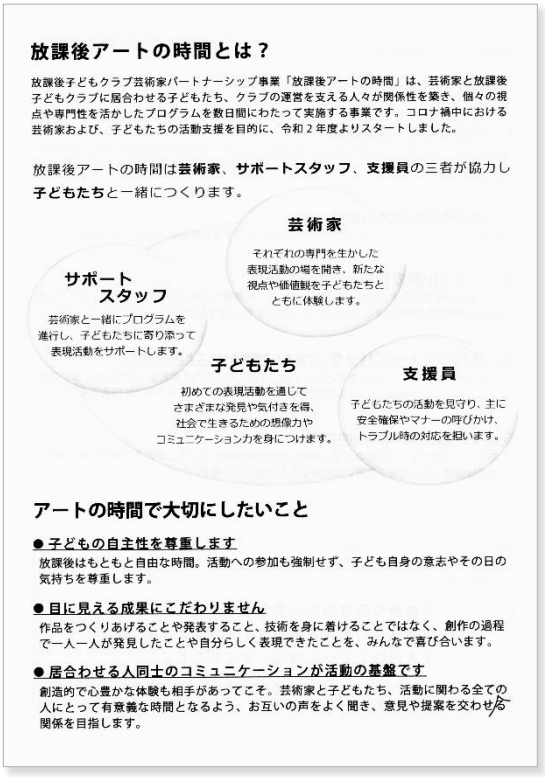
運営全体の合意事項として2年目に配布された『放課後アートの時間とは？』がある。ここには、活動に際して尊重すべき「アートの時間で大切にしたいこと」という注目すべき3項目が掲げられている。「子どもの自主性を尊重します」「目に見える成果にこだわりません」「居合わせる人同士のコミュニケーションが活動の基盤です」がその3項目である。

「子どもの自主性を尊重します」の説明として、「放課後はもともと自由な時間。活動への参加も強制せず、子ども自身の意志やその日の気持ちを尊重します。」と明確に謳われており、こうしたかたちで2年目にして早くも子どもの自主性尊重が明文化されたことを高く評価している。

(3) 目に見える成果にこだわらず

上記「アートの時間で大切にしたいこと」の2つ目「目に見える成果にこだわらない」点についても触れておこう。

目に見える成果にこだわらないとの方針は、言い換えれば、子どもや我々アーティストの内面を重視し、双方とものびのび過ごせるよう配慮しようとの宣言である。「作品を作りあげることや発表すること、技術を身に着けることではなく、創作の過程で一人一人が発見したことや自分らしく表現できたことを、みんなで喜び合います。」との説明も付されている。これは、(財源に税金を充当する)この種の事業では、画期的なコンセプトと言えるのではなかろうか。というのも、公金を投入



放課後アートの時間とは？

放課後子どもクラブ芸術家パートナーシップ事業「放課後アートの時間」は、芸術家と放課後子どもクラブに居合わせる子どもたち、クラブの運営を支える人々が関係性を築き、個々の視点や専門性を活かしたプログラムを数日間にわたって実施する事業です。コロナ禍中における芸術家および、子どもたちの活動支援を目的に、令和２年度よりスタートしました。

放課後アートの時間は**芸術家**、**サポートスタッフ**、**支援員**の三者が協力し**子どもたち**と一緒につくります。

芸術家
それぞれの専門を生かした表現活動の場を開き、新たな視点や価値観を子どもたちとともに体験します。

サポートスタッフ
芸術家と一緒にプログラムを進行し、子どもたちに寄り添って表現活動をサポートします。

子どもたち
初めての表現活動を通じてさまざまな発見や気付きを得、社会で生きるための想像力やコミュニケーション力を身につけます。

支援員
子どもたちの活動を見守り、主に安全確保やマナーの呼びかけ、トラブル時の対応を担います。

アートの時間で大切にしたいこと

● **子どもの自主性を尊重します**
放課後はもともと自由な時間。活動への参加も強制せず、子ども自身の意志やその日の気持ちを尊重します。

● **目に見える成果にこだわりません**
作品をつくりあげることや発表すること、技術を身に着けることではなく、創作の過程で一人一人が発見したことや自分らしく表現できたことを、みんなで喜び合います。

● **居合わせる人同士のコミュニケーションが活動の基盤です**
創造的で心豊かな体験も相手があってこそ。芸術家と子どもたち、活動に関わる全ての人にとって有意義な時間となるよう、お互いの声をよく聞き、意見や提案を交わせる関係を目指します。

「放課後アートの時間とは？」

する以上、いわゆる“成果の見える化”が必要条件とのコンセンサスが社会に存するからである。

また“成果の見える化”は、例えば、講評会や作品展示等、参加メンバーの実力向上や“やる気”を引き出す装置として重要とのコンセンサスもある。私自身、担当する絵画サークルや大学等において講評会や展覧会を定期的に実施し、作品の完成まで生徒・学生とは粘り強く付き合う。

しかしながら、こうした“成果の見える化”のプラス面が、“見栄え”を過剰に気にする組織としてのマイナス面に変質するケースも時として起こり得る。かかる問題は、少子化問題に絡む生徒獲得の動きと相俟って、保育園や幼稚園、学校等が展覧会等による宣伝効果に腐心するあまり、その準備段階で、(子どもたち一人ひとりの制作プロセスや内面的充実を大切にしようとする)新任の保育士、教諭等に必要以上のプレッシャーをかける事例としてもしばしば耳にする。

確かに、そもそもアート活動とは、例えば全参加者の作品を一律に人目に晒すことが最終目的では無かろう。すなわち“文化”とは「目に見える文化」(＝水面上の氷山)と「目に見えない文化」(＝水面下の氷山)の総体である。重要文化財であれ子どもたちの絵画や工作であれ、目に見える作品は結果であり“文化遺産”に過ぎないとの考えもある。“文化”とは、そもそも時代や地域あるいは個人の歴史に根差す我々の生活の中で不断に営まれる精神的な所作でもあり、従って“かたち”とな

った作品はかかる精神的営みが外化された結果に過ぎず、作品を精神よりも上位に措定する考えは危険を孕む、という論理がそれである。

歴史に見られる極端な文化遺産への攻撃・破壊行為等に至りさえしなければ、目に見えない文化を大切にしていこうとする姿勢は、むしろ高い見識にもとづくアート的営為として捉えられる。この点、小中高等の公教育での授業、あるいは民間の造形教室等とも一線を画する「放課後アートの時間」は、その発足時の自由を活かし、2 年目にして早くもアートへの深い造詣にもとづくきわめて注目すべき画期的コンセプトを掲げたと言えるだろう。

加えて、特に私が注目したのは、上述した事情を踏まえた上で、なおかつ(展示活動も含めた)「放課後アートの時間」の“活動の見える化”(＝情報発信)が活発になされている点である(本章(6)で詳述)。つまりここでは、活動自体の“見える化”と“目に見える成果にこだわらず”の両立、すなわち可視化と、非可視化(＝可視化し得ぬ価値)の対象が丁寧に峻別されているのである。

(4) コミュニケーションの大切さ

上記「アートの時間で大切にしたいこと」の 3 つ目「居合わせる人同士のコミュニケーションが活動の基盤です」についても、ここで触れない訳にはいかない。この目標の説明には、「創造的で心豊かな体験も相手があってこそ。アーティストと子どもたち、活動に関わるすべての人にとって有意義な時間となるよう、お互いの声をよく聞き、意見や提案を交わせる関係を目指します。」とある。

こうした活動方針は、“目に見える結果にこだわらない”けれども“目に見えない結果の価値”を大切にしていこうとする方針の証左である。また、特に我々日本の“ものつくり”系アーティストはコミュニケーションを必ずしも得意としてこなかった伝統があり、それをもフォローしている。

私見ではあるが、概して個性・自由を大切に育んできた文化は、コミュニケーションを大切にする土壌を同時に築いてきたのではあるまいか。ハーモニーを「多様性の中の調和」と定義したのはライプニッツであったが、近年のダイヴァシティ重視の考え方とともに、差異が人類の相互作用をより豊かにするという理解にもとづく、より今日的な複雑な調和への移行に焦点をあてた「画一性なき調和、分断なき多様性」の概念にも通じる(註 2)。そして、ここで前提となるのはコミュニケーションの力であろう。

個性や自由の尊重は、個々人やそれぞれの地域性等の違いや多様性を前提として

おり、従って“以心伝心”的な意思疎通をまずは当てにしないほうがよい。以心伝心は、コミュニケーションにおける最終ゴールないし理想のかたちとも解釈出来ようが、そこへ至るには様々な摩擦や軋轢を通過しなければならない。個性・自由・多様性の尊重とコミュニケーションスキルの高さとは、概ね比例してゆくのではないかと考える。

(5)　多様な目的意識が混在する集合体－その中での活動

私はこれまで、子ども対象の一般の美術(造形)教室、公開講座、小学校、そして大学の授業等で多数のアート指導を経験してきたが、それらを踏まえ「放課後アートの時間」とそれらとの違いを掻いつまんで述べる。

先述の通り、「放課後アートの時間」は活動に興味のない子どもがひとつの時空間で別個の活動が出来る環境があり、活動に参加する者もいれば参加しない者もおり、その混在が許される状況だ。従って、**「放課後アートの時間」は子どもとアーティスト各々の、自主的な強い参加意識が全ての活動の源**となる。この点が最大かつ根本的な違いである。

他方、本節の冒頭で述べた「放課後アートの時間」以外の諸活動は、全てひとつの目的を持った人々の集合体である。特に多人数になると、指示に従わない子どもが現れた場合等は一定の秩序維持のため、指導者が倫理規範への教育的配慮を促していく場面が多くなる。例えば小学校の義務教育では、全ての子どもに授業の目的を等しく実施しなければならず、その傾向が顕著だ。

この点、子どもが参加したくなければ参加しなくて良いという「放課後アートの時間」に固有のルールは、子ども達にとってばかりでなくワークショップを実施するアーティストにとっても幸いしている。

例えば、小学校の授業において図工の課題を途中で放棄したままの子どもには、半ば“強制的に”やらせるようにとの意向が働きがちだ。しかしながら、そうした強制は「放課後アートの時間」には無い。むしろ、画家が描きかけの絵を放置したまま長くアトリエで過ごす時間が多い様に、“時期が来るまで待つ”ことは創作にとって儘ある自然な感覚ではなかろうか。

また、「放課後アートの時間」では、－例えば、画家がキャンヴァスを前に偶発的な要素や予見不可能なハプニングを柔軟に受け入れつつ絵画制作をする様に－　ある程度の自由な雰囲気の中で、様々な偶然を肯定しながら進めることが出来る。プランの変更や、参加したがらない子どもの放任等の柔軟な対応　－子どもがそばで眺めて

いるだけでも充分に有意義な時間を過ごせるとの前提での対応－　がワークショップのプラスの成果に繋がるケースも多々ある実感を持つ。

総じて、「真善美」で言うならば、「善」(倫理規範)よりもアーティストの「美」(感性)や「真」(内的真実)の部分を、さほど裏切らずに活動を進めることが出来る。これは、「放課後アートの時間」の本質的な特色と言えるだろう。

(6)　ＴＡＰによる情報伝達・情報発信

日本は、社会を変えられると思っている若者の割合が先進国の中でも低い数字だが(註 3)、気がつけば、日本の国力の低迷とそこからの再興がこの国の抱える問題となって久しい。若者の「世の中を変えたい」という思いが実現されにくい現実があるのではないか。ごく当たり前の社会システムの新陳代謝が、ごく当たり前に行なわれていないのは何故だろう。

しばしば指摘される様に、日本には際立った外圧が出現しない限り必要な変革をし辛い伝統があり、その要因は、改革を提案する人が変化に伴う責任や痛みを恐れ過ぎるがゆえであり、また超高齢化社会の現実が変化を嫌う傾向をさらに促しているようにも見える。

前置きが長くなったが、「放課後アートの時間」のＴＡＰ運営チームでは、1 年目から 2 年目に入った時点で既に大きな変革があった。インスタグラム活用の拡大と Slack の導入により、「情報の共有・見える化・発信」が進んだのだ。これにより、他のアーティストやスタッフの動きが互いによく分かり、精神的な結束感すら覚え

たのは私だけではあるまい。

さらに、Slack に蓄積された情報　ーアーティスト、コーディネーター、ＴＡＰスタッフ間の相互のやり取りー　は、今後、本事業が継続された場合、参加アーティストが参照可能な貴重な資料として活用出来よう(次号で詳述)。また、放課後子どもクラブの支援員もアクセス出来るようにすれば、彼ら彼女らの参加意識を高めるツールにも成り得る。

これまでフリーランスとして様々な組織と関わってきたが、発生しがちな問題の多くが情報の共有の在り方・コミュニケーションの不備等に起因している。Slack の様な(透明性と秘匿性が比較的容易に担保出来る)ツールを採用していれば起こらずに済んだ問題に、今でも他の組織で時折り遭遇するが、Slack 導入の提案を即座に受け入れたＴＡＰ運営チームの柔軟性はまさしく慧眼と言うべきだろう。

(7)サポートスタッフによるサポート活動

「放課後アートの時間」には、担当アーティストを現場でサポートするアシスタント制度があり、このアシスタントは「サポートスタッフ」と呼ばれる。アーティスト自身で適任者を依頼してもよいし、そうでない場合はＴＡＰが派遣してくれるという有難い制度だ。

私はこのような場合、可能な限りベストな人材を自身で探し依頼することを常としてきた。「放課後アートの時間」では、参加した 2 年間の活動で計 4 名に依頼することとなった。1 年目は造形作家 1 名にシーズン 8 日間を通して、そして 2 年目は元ギャラリスト、小学校教諭(音楽専科)、ＴＡＰ学生スタッフの 3 名に 9 日間を分担依頼した。

1 年目の造形作家は学生時代からの友人で、野外彫刻コンクール展でグランプリを獲得した経歴があり、現在も彫塑、絵画等、幅広く創作活動を行なっている。

2 年目に依頼した元ギャラリストは(当時)都内で 25 年のキャリアを持つ目利きのエキスパート、現在はギャラリーに復帰している。そして、都内私立小学校の教諭もまた学生時代からの音楽学部の友人で、能楽堂で観世清和と共演する等のアーティスト活動も行ない、聖歌隊児童を連れイギリスの聖歌隊児童と交流したこともある。ＴＡＰ学生スタッフは大学で芸術支援を専攻、造形教室やアートイヴェント等のサポート活動に大変熱心で、1 年目の担当アーティスト全員に自ら 1 日ずつサポートを申し出、自身の研究の糧とした逸材である。

以上 4 名の熱意あるサポート活動により、私のワークショップは様々なフェーズに

おいて助けられたことは感謝に堪えない。4 名それぞれに個性と実績がある。勿論、過去の経歴はどうでもよいかもしれぬが、依頼したサポートスタッフ全員がそれぞれに表現することの本質を熟知しており、それが端的に彼らの経歴に示されている。

私はこれまで、ワークショップ 1 シーズンのアシスタントを、原則同じ人物に通しで依頼してきた。そもそも「是非サポートをお願いしたい」という様な思いが、こうしたイヴェントでは様々なフェーズで好結果を生む。また、同一人物によるサポート活動は、子どもたちをはじめとするそこに集う人々の相互理解や、ワークショップの主旨とプログラムへの理解、具体的な段取りへの理解、また同じ話をリピートせずに済むなど等の点でも効率がよい。相性等も含め、担当アーティストが自身で適任者を依頼することがベストであり、やむを得ない欠員等の場合、それを補完するかたちでコーディネーターによるマッチングが機能すればと考える。

(8)「放課後アートの時間」が生まれた社会背景

2020 年(令和 2 年)、それまで減少傾向にあった日本の自殺者数は 11 年ぶりに増加した。女性や若年層の自殺が増えたのは、新型コロナ感染拡大を契機として、経済的な苦境に追い込まれたり、孤立に陥ったりする人が増えたためとみられる。

厚生労働省の統計によると、2022 年度(令和 4 年度)に自殺した小学生は 17 人であり、これは文部科学省が自殺の統計調査を始めて以降最多である(註 4)。2020 年ユニセフ発表の子どもの幸福度ランキングによれば、日本は世界 38 カ国中、子どもの幸福度の「身体的健康」が第 1 位であるにもかかわらず、「精神的幸福度」はワースト 2 位に位置している。こうした統計にも子どもの自殺増加のひとつの要因を垣間見る思いだ。(註 5)

一方、コロナ禍において、アーティストや俳優、制作スタッフ等芸術文化活動に関わる人の 9 割以上が行政からの金銭的支援を「不十分」と感じていた(註 6)。ぴあ総研の試算によると、2020 年のライブ・エンタテインメント市場規模は、2019 年の 6295 億円から 8.2 割減となる 1106 億円に落ち込んだとされる。(註 7)

コロナ禍の渦中でアーティストたちがアートの無力感に襲われ、自身の無用性に苛まれ、表向き「みんなを元気に」と言いながら、当事者たち、つまり他ならぬアーティスト自身が最も“元気がない”様子を感じたのは私だけではあるまい。

以上、コロナ禍における子どもとアーティストの状況変化について、報道で見聞することの多かった事象を私の目にとまった具体例とともに掻いつまんで述べた。(アーティストに対する気遣いからか)取手市やＴＡＰからそうした統計や社会の情勢が

殊更聞こえてくることは無かったが、「放課後アートの時間」は、かかる社会状況を俊敏に捉え対応した施策と言えるのかもしれない。

余談ではあるが、個人的にはコロナ禍において、ポスト印象派の画家・ゴッホの手紙の次の一節が頭をよぎることが時折りあった。－「私の悩みはまさにこのことだ、自分はいったい何の役に立つことができるのだろうか、何ものかのために、有用な、意味のある役割を果たすことはできないだろうかという疑問だ…」（註 8）。彼はそうしたことを問い詰めた果てに画家となったのだが、では彼は生涯に個展を開催したことがあったのだろうか等と取りとめ無いことを思うことが多々あった。

話はやや飛躍するが、戦時下のウクライナにおいて文化施設を訪れた人や文化イヴェントに参加した人々が増えたとの報道が昨年(2023 年) なされた。非常時におけるアート活動についての本質を図らずも垣間見る思いである。(註 9)

コロナ禍とアートをめぐる議論は、感染が拡大し始めた当初メディアにおいて様々展開されていたが　－乾燥しきった砂漠の地表にみるみる水が染み込んでゆくように－　アートはどのような状況であれ常に我々の生活に淀みなく染み込んでくる。「放課後アートの時間」の活動は、そんな現実から出発しているのではないだろうか。

註

1)　本事業はアートの多様な視点や価値観をともに体験することで、子どもたちのコミュニケーション能力が育まれると同時にアーティストの新たな実践・研鑽の場となること、他者との関わり合いを通じて、社会とつながるきっかけを得ることを目指してきた。事業の概要については拙論を通じこれまで様々述べてきたので繰り返さない。詳しくはＴＡＰホームページを参照されたい。

2)　「多様性の中の調和」2023 年 11 月 17 日(金)9:30(最終更新日)、『Wikipedia 日本語版』(2024 年 7 月 10 日参照)

3)　『18 歳意識調査』日本財団。「第 20 回−社会や国に対する意識調査−」詳細版（日本）2019 年、「第 20 回−社会や国に対する意識調査−」要約版 2019 年、「第 46 回−国や社会に対する意識（6 カ国調査）−」報告書 2022 年、「第 62 回−国や社会に対する意識（6 カ国調査）−」報告書 2024 年。(https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/eighteen_survey　2024 年 7 月 10 日上記 4 資料を参照)

4)　『令和 5 年中における自殺の状況』、「図 1-12 小中高生の自殺者数の年次推移

(性別)」厚生労働省自殺対策推進室　警視庁生活安全局生活安全企画課、2024年、P15。2016～2019年、子どもの自殺は微増傾向にあった。小学生の自殺は2022年をピークとし、翌2023年には13人に減少している。
(https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/R06/R5jisatsunojoukyou.pdf　2024年7月10日参照)

5)　『イノチェンティ　レポートカード 16　子どもたちに影響する世界　先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か』ユニセフ・イノチェンティ研究所、2020年(日本語版2021年)、p11。
(https://www.unicef.or.jp/library/pdf/labo_rc16j.pdf　2024年7月10日参照)

6)　『美術手帖』　MAGAZINE、NEWS/HEADLINE、2020.4.15「9割が「国の金銭的支援不十分」。新型コロナによる芸術文化活動への影響明らかに」
(https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/21697　2024年7月10日参照)

7)　『「2021ライブ・エンタテインメント白書」のサマリー』ぴあ総合研究所、2021年。(https://live-entertainment-whitepaper.jp/pdf/summary2021.pdf　2024年7月10日参照)

8)　『ファン・ゴッホの手紙』二見史郎　編訳、圀府寺司　訳、2001年　みすず書房、P45。訳は『近代絵画史(上)ゴヤからモンドリアンまで』高階秀爾　著、1975年　中公新書、P170を採用。

9)　「ウクライナの世論調査で、戦争中に文化施設を訪れた人や文化イヴェントに参加した人々が増えたことがわかりました。この意外な結果が、人々にとってどれほど文化が重要なのかを表しています。それは人々の安らぎであり、美しき世界への扉なのです。」ウクライナ文化大臣トカチェンコ氏の弁。『news23』TBSテレビ、2023年2月27日放送。

画家

昭和女子大学　清和大学

静岡英和学院大学　東京保育専門学校

非常勤講師(美術・造形)